

い生命が失われるなど最悪の事態が続く。

何の望みも楽しみもない、ただ願うは一日も早く日本に帰りたい、これが唯一の夢だった。こんなとき、日本兵の手によって風呂が造られ、週に一回位の入浴ができるようになった。身も心も疲れきっていた時だけに入浴によりわずかながらも心休まり、ささやかな憩いの場となった。

私は馬舎当番六人の中選ばれ、馬八頭、牛六頭に豚等の飼育に当たることになった。この仕事は六人で十二時間交代、休みなしの決して楽な仕事ではなかった。しかし空腹に堪えがたい時には馬糧や豚の餌を食べて空腹をしのぎ、栄養失調から身を守ることができた。

やがてシベリアに四度目の冬が近づく九月、待ちに待った帰国の時が来て列車に乗る。

振り返ってみれば、この収容所に収容された時に千人の部隊であった。皆日本に帰る日を夢見てお互いに励まし合って来たのに、栄養失調、重労働等に耐えきれずに、また事故等により帰国の夢ははかなく消え去

り、凍土シベリアに眠る二百余人の友を残して行くのは残念だが仕方ない。

やがて列車はウラジオに向けて発車、今は亡き友の冥福を祈って両手を合わせ、アルチョムを後にする。

しばらくして列車はウラジオに到着。四、五日してナホトカに着き、船を待つ。しばらく待つうち、引揚船興安丸が入港する。この船に乗船。

長かったシベリア抑留から解放されて舞鶴に入港。

各種手続終了後、懐かしい我が家に帰ったのは昭和二十三年十一月二十四日。

帰国後、有線の電気工事、積水化学関連工場に勤務し、無事定年退職し現在に至る。

シベリアの思い出

長野県 横内 弥六郎

大正九（一九二〇）年四月十六日、長野県諏訪郡川岸村に生まれる。

昭和十（一九三五）年、川岸村立川岸尋常高等小学校高等科卒業、家事の農業に従事。

昭和十五年、徴兵検査の結果甲種合格、北支派遣軍歩兵第八大隊入隊と決定。

昭和十五年十二月一日、宇都宮練兵場に集結。被服、歩兵銃等を渡され、東京芝浦港を出港。

昭和十六年六月、中国タンクー港上陸、天津、北京、通州等にて軍事教育を受け、教育終了。独立歩兵八十大隊第二中隊に所屬、河北省各地に駐留、討伐作戦等に従事。

昭和二十年六月、急遽移動命令が出て、貨車へ弾薬、食糧、被服、馬数十頭を積み、歩兵四個中隊、重機関銃一個中隊、歩兵砲一個中隊の千三百人位が通州駅付近より出発。何も知らされぬまま六月十四日滿支国境通過、奉天西方通遼県に到着、ここで幕舎生活に入る。一個中隊ごと陣地を構築。対戦車攻略の訓練に明け暮れる。

八月初旬、国境の急迫が伝えられ、全滿の兵は奉天（瀋陽）に集結し、最後の一兵になるまでソ連軍と戦

うべしとの命令が出る。北支で戦闘をくり返して来た我々には既に覚悟はできて動揺もなかった。

数日して終戦を知らされる。武装解除もなく各地を移動。最後に武装解除され、奉天北飛行場に集結する。時計、万年筆等、貴重品はほとんどソ連兵に取られてしまう。

九月末頃、ウラジオオから日本に帰すと言われ、貨車に五十人位ずつ乗せられ北へ向かう。

貨車はトイレがなく、小刀等で床に穴をあけ用を足す。時折南下する邦人の乗った貨車と行き会う。着の身着のままの邦人にカンパンを投げてやる、出発時には食糧は充分持っていた。時折配られる黒パンなど、中をえぐり煙草の灰皿にしていた。日がたつにつれ食糧が底をつき、灰皿さえ分けて食べる。途中、中国人の機関士が逃げて、日本軍の鉄道隊の中にいた機関士によって急場をしのいだこともあった。

十二月初旬頃であろうか、貨車は黒竜江省のほとり、黒河という町に着いた。黒竜江は既に凍っている。対岸ソ連のブラゴエシチェンスクまで荷物を橋に

積んで運ぶ。一往復八時間余、こんな仕事が毎日続く。飢えと寒さで凍え死ぬ兵隊も多く出た。ウラジオから帰れると信じて来たが国境越えて、無念の最期を遂げた人の数は多数にのぼった。

その後再び貨車に詰められ、ブラゴエシチェンスクを出発。ウラジオに向かってしていると信じていたが、夜空に輝く北極星を見て疑問を抱く。

数日後、列車は波打ち際に出る。日本海だと皆大喜び。ところがソ連の一兵士が「バイカル」と一言、皆がっかりであった。

湖畔を走ること一昼夜余、湖畔を離れて三日、列車は支線に入る。さらに三日後あちらこちらに炭鉱のボタ山の見える草原に着く、ここで下車。

スターリンスクに程近い「プロコピエフスク第四収容所」であった。ポーランド人が造ったという半地下式の宿舎、地下に穴を掘り丸太を組み小枝を敷き土をかけた建物。丸太で二階を造り、板を敷いてある、じめじめとして舎内には暗い裸電球が所々に吊るしてある。暖炉は入口に一カ所のみ。

作業は、煉瓦工場、炭坑労働、鉄道工事、そのほか多種にわたったが、いずれの作業にもノルマの分厚いノートがあり、これによって課せられる。食糧不足による体力の減退、想像もつかない寒さの中でノルマ達成は無理だった。達成できないと食糧を減らされる。煉瓦土を掘った穴にロシア人が投げ込んだ犬、ネズミ等を飯盒で炊いて食べたことも何回か。農作業に出た時、種ジャガイモを食べてしまい、後になって芽が出ないということもあった。また作業の帰り、キャベツを取るのを見逃してくれたソ連軍の下士官の計らいで空腹の足しにしたこともあった。

健康管理については、ソ連の軍医が尻をさわって重労働、軽労働と分けて決められる。いくら体調が悪くても一定以上の熱がないと休ませてはもらえない。

昭和二十三年夏になって、鉄道工事に回っている時帰国を知らされる。日本兵二百人程が一カ所に集められ列車でナホトカに着く。ナホトカで他の部隊と一緒にになり引揚船に乗り、昭和二十三年八月十三日舞鶴港に上陸する。

故郷を出てから八年ぶりの懐かしい我が家に八月十六日帰り着く。

以来農業に従事、今日に至る。

私のシベリア抑留

岐阜県 林 正彦

昭和十二（一九三七）年、土岐市土岐津小学校卒業と同時に三菱重工業名古屋航空機製作所入社。

昭和十七年、徴兵検査、甲種合格。

昭和十八年、各務ヶ原飛行場大隊入隊の予定が変更になり、門司老松公園に集合、約七日間各民家に宿泊。下関港より釜山上陸後、鉄路で黒河省嫩江第九七飛行場大隊入隊。その後、新京（長春）、チチハル等で教育を受ける。戦況の悪化とともに遼陽飛行場大隊より多くの特攻隊員を見送ったことは、今でも忘れられない思い出である。

八月十五日、終戦を迎えるとともに鞍山の昭和製鋼

跡地に移動、ロシア軍の指揮下に入り、機械等の解体作業が始まり、莫大な機械のすべてがロシアへ向けて発送されて行った。正に国家あげての泥棒行為であった。これを戦争犯罪と言わず、何と言うか。

昭和二十年十月末、軍の命令により国家賠償として三年間の労役に服すると言われて、部隊長以下全員が鞍山アハルより乗車、満州里を經由シベリア鉄道でウズベキスタン・アングレンに到着、抑留生活が始まる。

現地へ入って驚いたのは、水のない全くの砂漠地帯であったこと、町全体が囚人の街であること、ドイツ人の収容されていた跡へ入るも、果たしてこんなところで三年、命がもつだろうかと思った。

作業は、炭鉱作業、煉瓦造り、道路作業等あらゆる仕事をやった。

ドロを固めた煉瓦の家造りが始まった。一日で乾燥させる誠に粗末なものだった。が、ともかく家ができ、街作りが行われた。

炭鉱は主として露天掘り、雨の全く降らないこの土地でよくも三年間頑張れたものだと思つづく感じる。